



学会ホームページ <http://jasce.jp>

083号(2025年11月30日)

目次

日本協同教育学会 会長挨拶
次期大会開催地からのご挨拶
『協同と教育』『協同教育実践論文集』への投稿募集中
学会ワークショップについて
各地の研究会・勉強会

日本協同教育学会 会長挨拶

このたび、日本協同教育学会会長を拝命いたしました小松誠和です。日頃より本学会の活動をご支援くださる皆様に、心より御礼申し上げます。ここに就任のご挨拶を申し上げます。

私は臨床免疫学を専門とし、がん免疫療法や自己免疫疾患の研究に携わってまいりました。2024年度からは所属大学の教育関連部署に籍を置き、協同教育を基盤とした医学教育にも取り組んでおります。協同教育については、初代会長・安永悟先生のご指導を受けながら授業実践を重ね、現場でその力を実感してきました。

近年、教育を取り巻く環境は大きな転換点にあります。コロナ禍を契機としたICTの急速な普及や学習形態の多様化により、私たちは「ICTは目的ではなく手段であり、教育の本質は人と人との関係性にある」という原点を再確認しました。この認識に立ち、現場の知と学術的知を往還させる学会運営を進めます。古くても良い知恵は積極的に評価し、常に省察し継承します。同時に必要な革新は柔軟に取り入れます。

任期中は、次の四点を重点に取り組みます。

1. 教育現場との対話の場の創出
実践者と研究者が対等に語り合える場を整えます。
2. ICTを活用した学びの共有
ハイブリッド型の活動を通じ、地理的・時間的制約を越えた参加機会を模索します。
3. 若手・学生の参画促進
次世代の担い手が積極的に学会活動に関われる機会を増やします。
4. 知の継承と発信
学術誌(「協同と教育」,「協同教育

実践論文集」,大会抄録)のデジタルアーカイブ化を継続し、検索性と活用性を高め、社会へ分かりやすく発信します。

これらの取り組みは、現場に根ざした知恵や工夫、葛藤に寄り添い、それらを学術的に位置づけ直すための基盤づくりです。教育の現場だからこそ見える課題と可能性を、学会の知と結びつけ、新たな価値の創造に努めてまいります。

会員の皆様には、大会や各種研究会、認定ワークショップへの参加、学術誌(「協同と教育」,「協同教育実践論文集」)へのご投稿、その他の企画への協力をぜひお願いいたします。ご意見・ご要望は学会ウェブサイトの窓口にお寄せください。副会長の鮫島輝美先生、並びに事務局長の舟生日出男先生はじめ、理事会や委員会の皆さまのご助力をいただきながら透明性の高い学会運営を行うとともに、率直な対話を通じて自由で開かれた学会を共に創り上げていきたいと存じます。

結びに、これまで学会を牽引して

JASCE

学会ワークショップ 今後の予定 (判明分)

<ベーシック>

2026年3月7日(土)、8日(日) 【主催】

会場：創価大学(東京都八王子市)

講師：久末俊幸・関田一彦

<アドバンス>

2026年3月7日(土)、8日(日) 【主催】

会場：創価大学(東京都八王子市)

講師：久保田秀明

最新情報、詳細情報、参加のお申し込みは学会HP (<https://jasce.jp/1031workshop.php>)からお願いいたします。

(研修委員会)

こられた先達への敬意を表するとともに、会員の皆様におかれましても引き続きのご支援とご協力をお願い申し上げます。共に学び、共に未来を創る仲間として、どうぞよろしくお願いいたします。

次期大会開催地からのご挨拶

来年度の第22回大会を、2026年9月11日(金)～13日(日)に、大東市立市民会館(大阪府大東市)で開催いたします。今回の大会では、プレ大会を11日(金)に企画します。同市内の学校での研究授業を公開し、参加いただけるよう計画しています。

大東市では、2009年度より「学び合い、学び続ける明日の市民の育成」という基本理念のもと、「学び合う学校園づくり」を通して、自立し協同する力を育むべく、協同学習の理論を重んじた授業づくりが展開

されてきました。そして当初より、日本協同教育学会の設立にご尽力された先生方をはじめとした本学会の会員が、市内各校の先生方と連携し、協同学習の考えに基づいた授業が、継続的に推し進められてきました。大会を開催する2026年度は18年目に入りますが、協同の意義、技能、価値が、大東市における教育の文化として醸成されたかについて、あらためて問う局面に来ております。大東市における協同学習の「成人式」ともいえる第22回大会、みなさまのご参加を楽しみにしております。

日本協同教育学会第22回大会実行委員会

委員長 西口利文

『協同と教育』『協同教育実践論文集』への投稿募集中

『協同と教育』および『協同教育

実践論文集』への投稿を随時受け付けています。『協同と教育』『協同教育実践論文集』の新規投稿はWebフォームからの投稿となります。投稿フォーム、執筆・投稿規程は<https://jasce.jp/1091format.php>にあります。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。なお『協同教育実践論文集』については、投稿者が執筆のサポートを受けることを希望する場合、学会員の中から世話人を立てることができます。みなさまの投稿や問い合わせをお待ちしています。

学会ワークショップ開催報告

<ベーシック>

11月15日(土)～11月16日(日)

【主催】

会場：大阪医科薬科大学(大阪府高槻市) 3F講義室5

講師：小松誠和・安永悟

大阪開催のベーシックに関西地方(大阪・京都・兵庫・奈良・和歌山)を中心に札幌、金沢、東京、愛知、広島、鳥取、熊本という幅広い地域から、リピーター5名、参与観察1名を含む20名が参加されました。「協同学習の学習観・定義」「個人思考と集団思考」「協同と競争の考え方」など協同学習の理論と方法を、ラウンドロビンやシンクペアシェア、ジグソーなどの技法を用いて学びました。リラックスした雰囲気の中、参加者は各自の問題意識と重ねあわせて積極的にワークに取り組んでいました。協同学習を体

JASCE



験的に学ぶことができてよかった、分野や校種や立場は違えども教育現場での悩みを共有できた、これからの実践で活かそうだと感じた、といったコメントが寄せられました。(水野正朗)

各地の研究会・勉強会

(愛知地域)

協同学習を用いた看護教育研究会 in Aichi

◇第5回「協同学習を用いた看護教育研究会 in Aichi」を10月25日(土)に開催しました。看護教員や臨床看護師、そして、緒方 巧先生(協同学習を用いた看護教育研究会：大阪代表)と東海学園大学教授の水野 正朗先生(日本協同教育学会：理事)も参加してくださいました。

今回は「協同学習の理解を深め、自身の活動を支える工夫を考えよう!」をテーマに、協同の精神や協同学習へのそれぞれの現状(取り組み状況)や望む姿(理想)を明確にし、今後の教育活動に向けた工夫などの活用案を見出すことを目的に進め

ました。

ワークでは、従来の机上作業ではなく「えんたくん(円形のダンボール)」を使用し、4人1組で膝の上に乗せて、各自の思いやグループで共有した意見などを直接記入していききました。これまで意識していなかった「体格の違い」や「書くときの揺れ」に気づき、一つひとつの活動が単なる作業ではなく、「協同できるしかけ」になっていたことを実感しました。えんたくんを囲むことで自然と顔が向き合い、互いに支えながら話すなかで対等な関係性が生まれ、学びを深める場が形成されることを改めて感じました。「よく聴こう、短く話そう、言葉を書き留めよう」をスローガンに、まずは現状を共有し、次に理想像を個人で書き出し、その後再度グループ内で共有しました。他者の話から得た気づきも手元に書き留めていききました。

その後、緒方先生による「協同学習の構成要素と代表的な技法」に関するミニ講義を受け、水野先生とともに参加者の質問に丁寧に答えていただきました。お二人との対話を通じて、協同学習を実践に活かすための具体的なヒントを得ることがで

きました。講義の後、質疑応答から得たヒントをもとに、今後の行動や工夫を円の最も内側に書き込みました。参加者の現状はそれぞれ異なっている、共感できる部分が多くありました。立場や経験が違っても、協同の場では互いの思いや考えに触れ、学び合えることを実感しました。学校や臨床現場の教育は、途切れることなくつながっていることが重要であり、協同の精神が根付くことで、職場風土がより良くなり、学びの場が広がっていくことを改めて考える機会となりました。

最後に、他のグループの「えんたくん」をお散歩参観し、質問やポジティブメッセージをおくり合い、全体で共有することで、多様な視点や気づきを得ることができました。今回のワークを通して、今後の教育活動への活用案を見出すことができました。

終了後の懇親会にも15名の方が参加してくださり、楽しい語り合いができました。事後アンケートでは、アイスブレイクの重要性や時期に合わせた意図的な仕掛けづくり、目標・目的の共有や教材研究の重要性など、今後の教育活動に活用でき



JASCE

る具体的で実践につながる意見がありました。

(文責：佐藤奈弓・坂本真希)
◇第6回は2024年2月21日(土) 13時30分～17時00分、愛知県立総合看護専門学校で開催します。テーマなどのご案内は、12月中旬に配信の予定です。参加者の方と協同しながら、よりよい研究会を運営していけるよう努めてまいります。皆様のご参加をお待ちしております。

連絡先：協同学習を用いた看護教育研究会 in Aichi (aichi_kyoudou_2024@outlook.jp)

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会

◇第60回「協同学習を用いた看護教育研究会」を、2025年11月8日(土) 13時30分～17時30分、グランフロント大阪ナレッジキャピタル「The Lab」アクティブスタジオで開催し、新たな2名の方を含め21名の方が参加されました。5月の研究会に関田一彦先生をお迎えし、協同学習の基本的構成要素の重要性について学びを深めることができたことから、8月、11月と継続して基本的構成要素を軸にしたテーマを企画しました。今回は、基本的構成要素のうち2つの要素「互恵的協力関係(肯定的相互依存)」と「個人の責任性」が成立する授業の仕掛けをテーマに開催しました。

アイスブレイクの後、織田千賀子先生の授業実践を拝聴しました。まず、ジョンソンらの著書『学習の輪』をもとに、今回、互恵的協力関係(肯

定的相互作用)と個人の責任性の2つに焦点をあてた意図、これらが成立する授業の仕掛け、そしてジョンソンらが挙げている残り3つの基本的構成要素との関連について述べていただき、授業実践として成人看護学の急性期看護方法論を例に、2つの基本的構成要素が成立した授業のための工夫、これらの構成要素が機能していない場合の対応、今後の課題について発表していただきました。その後、参加者が自身の授業において2つの構成要素が成立するために行っている①工夫と②難しさについて意見交換しました。参加者は事前準備として自分の意見を付箋に書いて持ち寄ったため、可視化された意見を類別化しながら有益な意見交換をすることができました。その後、技法「特派員」を用いて他のグループとの意見交換を行い、最後に全体での質疑応答、グループ活動を振り返ってのコンプリメントを交わしました。

事後アンケートなどを通して、参加者から以下のような意見がありました。

- ・日々の講義の工夫や悩み(課題)について共有でき、意味づけや改善点、対策まで一緒に考える事ができ有意義だった。
- ・自身の実践の工夫についてなかなか抽出できずに参加したが、発表し合うことで自分の実践にも工夫があることをいくつか実感させられた。学生にも、このように安心して話せる場や否定をしない姿勢などを実感できる意見交換

の場を講義や実習でつくっていきたいと思った。

- ・肯定的相互依存の成立には、単に目標を共有するだけでなく、グループの成功が個人の成功につながる課題設定を綿密に行うことの重要性を再認識した。また個人の責任性のためには個々がアウトプットをしっかりと行い、グループ全体に貢献できるようなしなやかさを設けることが不可欠だと感じた。
 - ・互恵的協力関係(肯定的相互依存)と個人の責任性との因果関係や相関について問いを立てながら有益な意見交換ができた。2つの基本的構成要素が成立するためには学習者に学ぶ意義(役に立つと思える)を動機づけること、技法を適切に使い必要に応じてアレンジすること、振り返りの活動を通して仲間へ貢献できた自己肯定感や仲間への感謝・安心感などを育み、協同の意義を実感できるように工夫することの大切さを確認し合うことができた。
- 終了後の懇親会は、サントリーの



JASCE

ウィスキーハウス「WWW.W」で行い楽しい談笑のひとつときを持つことができました。今後もよりよい企画運営に努め、皆様のご参加を心よりお待ちしております。文責：緒方巧
◇【今後の開催予定】次回の第61回は、2026年1月24日(土)、13時30分～17時30分、場所はグランフロント大阪アクティブスタジオです。テーマのご案内は12月に配信させていただきます。

連絡先：研究会代表 緒方巧
(t-ogata@baika.ac.jp)

(中四国地域) 協同学習研究会(岡山)

◇今年度第3回の研究会を10月18日(土)にオンラインにて開催しました。学校行事等との重なりが多かったようで、事前に多くの皆様から欠席のご連絡を頂きました。当方のリサーチ不足でご都合の合わない日の設定となりました。お詫び致します。

当日は9名のご参加を頂きました。少人数でしたが中身の濃い議論を重ねることができました。今回は医療教育・看護教育系と学校教育・日本語教育系の先生方がほぼ同数で参加してくださいました。「協同学習」という共通項のおかげで、双方の現状と課題に新たな視点から光を当てることができ、とても充実した時間となりました。

今回は『協同学習を支えるアセスメントと評価』の第3章「標準テスト」を講読しました。学校関係では全国学力学習状況調査、NRTや大

学入学共通テスト、看護・医療関係では国家試験やこれに連なる模擬試験等が該当します。本書P.60の「学校の成績証明書が信頼できないという理由から、標準テストは発展」と、米国特有の理由と来歴を踏まえることから理解を進めました。私も含め、参加者の多くは相対評価を中心とした日本的な受験競争文化を経験しているからでした。また、今後の各章の読解に必要と思われる基本的な統計用語も確認しました。現在の小学校算数では「データの整理と活用」という領域があり、6年生でも「中央値」「最頻値」「分布」といった統計用語を学んでおり、調査統計に係る学習内容が充実していることも確認しました。

次回(第4回)は12月20日(土)10時～12時です。第4章を講読します。新たに参加希望の方は高旗(takahata@okayama-u.ac.jp)までメールでお知らせください。既にご参加頂いたことのある方は連絡不要です。出入り自由です。テキスト



を事前に読んでおくことが参加の条件です。なお、今年度の最終回(第5回)は2026年2月28日(いずれも土曜10時～12時)にオンラインにて開催します。テキストはAmazon経由での入手が便利です(上記の書籍の画像にリンクを張っています)。皆様のご参加をお待ちしています。

連絡先：高旗浩志(岡山大学教師教育開発センター takahata@okayama-u.ac.jp)

(九州地域)

第62回「協同教育研究会」

◇◇第62回(最終回)の研究会を下記の内容で開催します。皆様の参加をお待ちしています。

1.日時：研究会・2026年2月14日(土) 13時30分～17時10分

(情報交換会 18時00分～20時00分)

2.場所：久留米大学御井本館3階13BC 教室

3.主な内容

テーマ『温故知新』

(1) 話題提供「LTD話し合い学習法のこれまでとこれから」

a. 講師：安永 悟(久留米大学・文学部)

b. 内容：LTDは1960年代に米国で開発され、日本には1995年に導入されてから今年で31年になります。この間、高等教育の現場を中心にLTDが導入され、多くの実践と研究が蓄積されてきました。

本話題提供では、LTDに関する実践と研究をレビューし、LTD授業モデルの開発と実践について最近の

JASCE

事例を通して解説し、LTDの「これまで」と「これから」を検討します。

(2) 座談会「協同教育のこれまでとこれから」

a. 登壇者：杉江修治(元・中京大学) 石田裕久(元・南山大学)

関田一彦(創価大学) 安永 悟(久留米大学)

b. 司会：小松誠和(久留米大学・日本協同教育学会 会長)

c. 内容：LTDを中心とした話題提供をひとつの手がかりとして、日本の協同学習や協同教育について、登壇いただいた皆さんの想いを語り合ってもらいます。その際の検討内容は、次のように想定しています。各項目に関する登壇者の対話の後、参加者の皆さんも含めた対話を予定しています。

① LTD話し合い学習法についての評価と期待

② 日本の協同学習・協同教育についての評価と期待

③ その他

詳しい日程等は、協同教育研究所「結風」のHP (<http://yuikaji.me/>)をご覧ください。

問合せ先：ご不明な点があれば、次までお願いします。

連絡先：協同教育研究所「結風」
office@yasunaga.me

(全地域)

全国看図アプローチ研究会

◇『全国看図アプローチ研究会研究誌』26号を公刊しました

第1論文と第2論文は生成AIを活用した高校理科の看図アプローチ実践に関するものです。生成AIの教育現場での活用については「初等中等教育段階における生成AIの活用に関するガイドライン Ver.2.0」(文部科学省2024)が示されています。2つの論文は、いずれもこのガイドラインに即応した先進的内容になっています。また、理科以外の教科にも応用できる汎用性も備えています。

第3論文は「ふじかん」の活動実践報告です。「ふじかん」は「ふじた看図アプローチ研究会」の略称です。「ふじかん」は藤田医科大学の教員・職員が中心になって運営されていますが、他大学の教員や職員・企業職員・学生等も参加する多校種・多職種・多機関が連携したダイナミックな活動を行っています。また活動の熱量にふさわしい数々の成果を著書や論文として発信し続けています。そのような創造的共同体「ふじかん」の第26回目までの「歴史」をまとめています。「ふじかん」論文では、一連の看図アプローチ実践活動の評価も行っています。評価の基準としているのはジョンソン兄弟が提案している「協同学習の定義」です。この研究により「看図アプローチは協同学習の効果的なツールになっていること」が示されています。これまでの看図アプローチ研究では、看図アプローチの評価に関する研究が手薄になっていました。「ふじかん」の今回の論文はこれまでの看図アプローチ研究を補

完してくれる重要な成果にもなっています。

(文責 鹿内信善)

掲載論文▼

1. 生成AI利用の看図アプローチ職員研修—高校地学の発問づくり実践講座—

溝上広樹

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.26_pp.3-13.pdf

2. 生成AI作成ビジュアルテキストを利用した高校物理における看図アプローチ授業実践

—「加速度」の学習における生徒による発問づくり—

松尾健一・溝上広樹

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.26_pp.15-23.pdf

3. 「ふじた看図アプローチ研究会(ふじかん)」活動実践報告—理論と実践の往還に基づいた看図アプローチによる協同学習実践—

織田千賀子・朝居朋子・加藤治実・近藤彰・中村小百合・浅岡裕子・小八重和子・大山和寿・椿まゆみ・石田ゆき・鹿内信善

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.26_pp.25-35.pdf

4. 編集後記(鹿内信善)

<https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.26-henshukoki.pdf>